

Title	日韓両国の十八世紀における風俗美人画の比較研究 : 申潤福を中心として
Author(s)	李, 美林
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42202
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	李 美 林
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 15706 号
学位授与年月日	平成12年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	日韓両国の十八世紀における風俗美人画の比較研究 —申潤福を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 奥平 俊六 (副査) 教授 天野 文雄 助教授 藤岡 穰

論文内容の要旨

本論文は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて活躍した韓国の風俗画家申潤福の作品を中心に韓国風俗画とほぼ同時代の日本の作品とを比較した研究である。その目的は、韓国絵画史の中で大きく取り上げられることのなかった風俗画について、日本の作品との比較研究を通して、同質性と異質性を考察し、韓国における風俗画の位置づけを試みることにある。本論は、400字詰原稿用紙にしておよそ340枚よりなり、参考図版が付属する。

全体は第一部「韓国の風俗美人図」、第二部「江戸の浮世絵との比較」、第三部「上方の美人図との比較」の三部構成になっている。

第一部は、申潤福と韓国の風俗画に関するこれまでの研究史を示し、画家の伝記に関わる限られた情報を検証し、伝存作品を一覧する。さらに、申潤福の制作年の判明する基準作を抽出し、「蕙園伝神帖」(潤松美術館)、「女人俗帖」(中央博物院)、「美人図」(潤松美術館)を中心にその特質を論じ、画風展開を考察する。方法としては画風表現以外に、落款の書体と名号の用い方を詳しく分析する。

第二部は二章に分けられ、第一は鈴木春信、第二は喜多川歌麿とそれぞれ比較を行う。

18世紀半ばに錦絵を創始し、古典主題の見立てによって世俗的な人物表現の型を作った浮世絵師春信の作例との比較では、まず春信の研究史を概観し、活躍した時代背景を考察し、次に春信の作品の中からとくに同様のポーズをとる一人立ちの美人図および二人で構成される作品を取り上げ、それぞれ申潤福の作品と比較する。ここでは、うつむき加減で曲線的な姿態を見せ、小道具によって像主の身分を特定させる同様の構造を持ちながらも、両者の類似よりも相違点が浮かびあがる。美人画として像主の個性を限りなく捨象していく春信画に対して、現状では特定不能ながら肖似性を追求した申潤福画の特異性が強調される。

歌麿の作品との比較では、像主の個別性を表現する方法に焦点を当てている。歌麿の研究史を概観し、スナップショット的な視点で市井の女性の美しさを切り取った歌麿の大首絵の表現と申潤福作品の異同を考察するが、ここでもさまざまな同質性を認めつつも異質性が強調される。

第三部では、18世紀に上方で一世を風靡した画家円山応挙を取り上げ、「楊貴妃図」をはじめとする美人図と申潤福の作品とを比較する。応挙は写生主義によって江戸時代の上方面壇を主導したのだが、「人物正写図巻」をはじめとする画稿類の示す写生の修練によって獲得した精密な表現が、架空の唐美人を描くに当たっても徹底して用いられている。また、「四条河原納涼図巻」などの群像表現は、申潤福の「蕙園伝神帖」に見るような市井の人々を描いた

作品と近い表現意図を持つものであり、申潤福画ともっとも近いところが多いが、申潤福が画中に記した「伝神」の意味と、応挙の「写生」の意味を考察して、ここでもやはり相違点を認める。

「結語」として、同じく封建的な社会のもとでの美人風俗画の制作でありながら、韓国の美人風俗画が日本ほど多彩な展開を見せず、異質なのは、やはり儒教倫理による感覚的な統制のあり方の違いに根ざすところが大きかったのではないかと述べる。

論文審査の結果の要旨

従来の韓国美術史は仏教彫刻や高麗仏画など重要な作品が多く伝存する仏教美術を中心に語られることがほとんどであった。朝鮮時代の絵画作品に説き及ぶ場合も、中国文化の影響をつよく受けた文人の山水画が中心である。最近では不思議な造形感覚で花や鳥を描く民画が注目され紹介されることも多いが、美人風俗画に関する研究はたいへん少ない。とくにそれを中国や日本の風俗画と比較して考察する研究はこれまでのところ皆無といってもよい状態である。その点では本論文は画期的なものであり、韓国風俗画を東アジア絵画史の視点で考察する端緒となりうるものである。

韓国の風俗画は、厳格な儒教倫理のために制作数も伝存数も限られており、その展開も日本のような多様性は持ち得なかった。また、同じ理由によって先行研究が少なく、記述の原拠や作品の所在が十分に開示されないという困難な事情もある。したがって、韓国側の作例を韓国最大の風俗画家申潤福に絞り込んだこともいたし方ないところだが、他の風俗画家たちの作品にももっと焦点が当てられてよいだろう。さらに、論の中で多少ふれてはいるが、東アジア絵画史の視点からは、つよい影響を受けた可能性が予想される中国の仕女風俗図、および中韓の肖像画との関係にもう少し論究すべきではないかと思う。

また、申請者は当初、朝鮮通信史を通して韓国国内に持ち帰られた浮世絵の韓国風俗画への影響を調べることから始めたのだが、作品の精細な比較をしていく中で異質性の方に視点を向け、結果としてその可能性にはまったくふれていない。現時点で論究するだけの十分な資料が見出せないにしても、この視点は捨てるべきではないと思う。

本論文には残された課題も多いが、比較対象としての春信、歌麿、応挙など江戸時代絵画については最新の研究まで読み込み、その作品を申潤福画と丁寧に比較していった努力は高く評価される。また、漢字教育を受けていない世代でありながら膨大な文献を読みこなし、先行研究のほとんどない分野でなされた論考であることを考慮すれば、十分な成果と認めることができる。よって、本研究科は本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。